

本科 1 期 7 月度

解答

Z会東大進学教室

早大国語



【問題】(演習)

出典：関根政美『多文化主義社会の到来』／早稲田大学 第一文学部 01年

文章略解

人種やエスニック集団は共同幻想に過ぎない。民族文化も本来的に雑種であり、その境界も可変的でファジーなものである。新たな文化融合により個性的な雑種文化状況を生み出していく前提として、国内全ての文化を対等に共存させ、交流と理解を促進する、多文化主義が必要だ。その際、発展と変化のための交流ということが重要である。人は、自分の育った文化に愛着を抱くが、その文化が過去と同じだと見なすのは思い込みに過ぎない。

解答

問1 ホ

問2 I=二 II=イ III=ロ IV=ホ

問3 甲 多文化主義〔27行目〕 乙 本質主義的〔30行目〕（本質主義的な〔50行目〕も可）

問4 ロ

問5 ニ 問6 ニ

【問題】(自習)

出典：渡辺京二『逝きし世の面影』（草書房・一九九八年）第一章 ある文明の幻影の一節／早稲田大学 政治経済学部 00年

文章略解

サイードはオリエンタリズムの本質を「オリエントを支配し再構成するための西洋のスタイル」と暴いた。このコンセプトは日本に対するネガティヴな評価に共感する心的機制をもつ日本の知識層に受容された。オリエンタリズムがオリエントの人間と関わらない概念である以上、本来日本人はそれを拒否すべきであるにもかかわらず、それが我が国の論壇で歓迎されたのは、サイードの論の中に一種の近代主義が隠し持たれていたためでもある。

解答

問1 てんめん　問2 口　問3 ホ　問4 日本の知識層〔6字・16行目〕

問5 鬼　問6 ニ　問7 措定　問8 口・ホ

解説

本文は、内容的に

- ①サイードの「オリエンタリズム」批判の紹介（冒頭）15行目、25行目「サイードのオリエンタリズム批判は」（31行目）
- ②日本の知識層が安易にサイードの論を受容し、援用することへの批判（16～25行目「気づかないふりをする」、32～56行目）
- ③サイードの思想に対する分析・批判（57行目以降）

という三点に集約される。それぞれについて本文の論理を整理してまとめる。

①西欧の「オリエンタリズム」とは、人間的現実を根拠のない抽象によって「東洋と西洋」に分割し、現実には存在しない「東洋対西洋」という認識論的枠組によつて構成された「西欧の中心性と普遍性」という観念に立脚し、支配者としての自己確立のために作ら

れた虚像であつて、そこで語られる西欧人の東洋に対する認識は、現実の「オリエント」とは何の関係もない。（1～6行目「彼によれば～高度に政治的な制度」、11～12行目「オリエントそのものと～悪質かつ手のこんだ虚像」、27～30行目「西欧的基準からの～によつてもたらされた虚偽觀念」）

②サイードの「オリエンタリズム」批判に見られる西欧の「オリエント」觀の特徴は、ほぼそのまま十九世紀の日本に関する欧米人の日本に関するイメージの特徴と一致する（18～22行目「なるほど、サイードが～あてはめることができる」）が、欧米人が十九世紀日本について賛美するにせよ罵倒するにせよ、「東洋と西洋」という区別にもとづく思考に立脚している以上、サイード的見地からはそれらの言説が虚偽であるという点で変りがない（33～36行目「なぜなら、讃美するにせよ～なんら変るところはない」）。にもかかわらず、西洋的価値觀を準拠枠として受容した（48～50行目「西洋の経験を～西洋的価値觀を準拠枠として来た日本知識人」）日本の知識層は、欧米人の日本賛美を否定する一方、日本批判に対しては無批判に受容している（36～39行目「ところが今日の～心的機制を植えこまれている」）。その点で、日本の知識層の発想はサイードの立場とは本質的に無縁であり（39～40行目「好意的なものであれ、本質的に無縁なのである」）、それを十九世紀日本に対する欧米人のイメージを無化する視点として援用するのは、単なる無責任な知的ファッショニズムすぎない（16～18行目「サイード流のオリエンタリズムの～愛用されつつある」、54～56行目「今日の論壇における～知的ファッショニズムに墮すもの」）。

③サイードの発想は、合理的進歩的なものをポジティイヴに評価する西洋近代的価値基準が垣間見えること、また彼の措定するオリエントの現実が西洋近代の知性の所産である「民族主義と階級闘争」という枠組によるものである点で、一種の西洋的近代主義の発想にほかならず、「近代」を真に乗り越える展望を拓くものではない（62～65行目「だがこのような脱構築は～欠いていたのではなかたか」、66～68行目「アラブ・イスラムを～ちらついているからだ」、70～74行目「彼がオリエンタリストに～拒否しようというのである」となる）。

以上まとめた本文の論理が、各設問を考える際の前提となる。

問1 「纏綿」は「てんめん」と読んで、日本語では①「まといつき、からみつくこと」②「様々な事情が入り組んで複雑になつていること」③「情緒深くてこまやかな様子」などという意味。早稲田大学が漢字・熟語の読みを問題にした場合、このように難度の高いものを出すことも多いので、普段から語彙を充実させておく必要がある。

問2

傍線部は「オリエンタリズムの諸特徴」を列挙している部分にあり、傍線部でいう「イメージ」が、西欧の側が「オリエント」に対して持つてている「イメージ」であることをまず押さえる。最初にまとめたように、本文でいう「オリエンタリズム」とは西欧の側が「オリエント」の現実とは無関係に作り上げた「虚像」であり、ここの「イメージ」もその一環ととらえるべき。その「イメージ」が「過去に蓄積されたテクスト」に「依存」している、というのが傍線部の内容なので、□「西洋人の東洋観〔＝オリエントに対するイメージ〕」が「過去の記録文学や紀行文〔＝過去に蓄積されたテクスト〕」の「影響下にある〔＝依存している〕」が本文の内容を押さえた選択肢となっている。

ほかの選択肢については、それぞれ、イ「近代以前のオリエントが」—「オリエントに対する西洋人のイメージ」ではなく「オリエント」自体の問題になつていて、ハ「現地人の言説が曲解されている」ニ「東洋生まれの作家の原作に基づいている」—少なくとも「東洋人の言説」を相手にしたこととなるが、「オリエンタリズム」は「オリエント」の現実とは無関係に西欧の側が作り上げた「虚像」である。ホ「データベースが蓄積され」「インターネットなどで広く公開」—「オリエンタリズム」は「オリエントを支配し再構成するための西洋のスタイル」であるとサイードが規定していることからもわかるように、「オリエンタリズム」は植民地主義の時代に成立したもので「データベース」だの「インターネット」だのは無関係。

問3

二カ所ある空欄の前後がいずれもサイードの「オリエンタリズム」批判の説明となつてていることに注意。最初の空欄（27行目）の直後の「それこそオリエンタリズムの正体である」の「それ」が指すのが空欄を含む「西欧の□□□」であることから「西欧の□□□」イコール「オリエンタリズムの正体」という関係をつかむ。さらに「西欧の□□□」の部分は「オリエントを客体として疎外し、それを自らと対照し区別することによつて獲得された」という修飾部を伴つてるので、「西欧の□□□」は「オリエントを疎外することによつて西欧の側が獲得した」ものであることがわかる。以上を押さえた上で、前述した本文の構造から、サイードの「オリエンタリズム」批判の説明となつている部分を検討してゆく。すると、11～12行目に「オリエントそのものとまったく無関係な、支配者としての西洋の自己確立のための悪質かつ手のこんだ虚像」とあり、「オリエンタリズム」によって西欧が手にしたもののが「自己確立」であることがわかる。すると、選択肢の中ではホ「アイデンティティ」がこの論理に即したものであると判断できる。なお、このような空欄補充問題の場合、選択肢に並んでいる語句の意味がわからないと手も足も出なく

なつてしまふ場合があるので、やはり基本的な知識の充実が不可欠である。

問4 本文の構造がつかめていれば簡単な問題。傍線部「論者」があるのは、すでにまとめた②「日本の知識層が安易にサイードの論を受容し、援用することへの批判」の部分にあり、設問が要求している「それ以前の箇所」に該当するのは16～25行目「サイード流のオリエンタリズム／気づかないふりをする」の部分で、この条件を満たす存在は「日本の知識層」しかない。

問5 二カ所ある空欄それぞれの直後の記述「～の首を取ったよう」「～子」で答えは出せる。いずれも慣用表現で、「鬼の首を取ったよう」は「この上ない手柄を立てたよう（得意）な様子」、「鬼子」は本来は①「親に似ない子」②「人間の子ではないような（手のつけられないほど凶暴な）赤ん坊」③「歯が生えた状態で生まれた赤ん坊」という意味。非常に基本的な知識なので、この程度の問題には正解できるようにしたい。

問6 空欄を含む一文「彼らの感覚からすれば、そのような拒否は、F所業である」を分析すれば、最初のポイントが「彼ら」「そのような拒否」の二点であることはすぐに気づくだろう。また「彼ら」が直前の一文「そのことをよくするものが、日本の知識層のなかに何人いるだろうか」の「日本の知識層」を指し、「そのような拒否」がその前の一文「サイードの～戦後の米国の占領による日本の徹底的な改造も、まさに露骨なオリエンタリズムそのものとして拒否されねばならない」であることも容易にわかる。つまり、「戦後の米国の占領による日本の改造」を「拒否」することは、「日本の知識層」の「感覚」の上ではどういうことになるのか、と考えることとなる。この場合、「拒否」する主体は「日本の知識層」自身なので、選択肢イ・ロの「他人に～着せる（ゆずる）」はこの時点では不正解。「日本の知識層」が、戦後の米軍主導の日本の改革をおおむね歓迎し、戦前戦中の社会体制を「超國家主義」「国粹主義」として排斥してきたことは常識である。したがって、「米国による日本の改造」を「拒否」することは、「日本の知識層」の感覚の上では戦前の「国粹主義」否定、「超国家主義」復活と結びつくこととなる。ニ「おのれに右翼民族主義者としての汚名をなすりつける」が正解となる。ちなみにハ「左翼急進主義」もホ「国際共産主義」も日本の戦前戦中の社会体制を否定する立場なので、正解ではない。

問7 「措定」は「自明のものとして設定された前提」ぐらいの意味。問5の慣用表現と同様、この程度の熟語は知っていたい。

問8 一つ一つの選択肢が二～三行以上にわたっている場合、一つの方法として、最初に各選択肢の「骨組み」だけを見て明らかに本文と矛盾するものをチェックする、というのがある。この設問では「趣旨に合致しないもの」を選べばよく、結論から言うと「骨組み」の検討だけで答が出る。イ「知識層の拒否感は、西洋的な普遍主義的見地を拒否できないから」口「日本は、複眼的な思考を身につけることができた」ハ「が西洋近代的価値基準となつたのは、西洋近代が、編成し直したから」ニ「サイードのオリエンタリズム批判は、東洋の現実を把握するのに必ずしも助けとならない」ホ「日本の知識層は、日本批判と日本讃美とを正しく評価することができる」のなかで、本文の内容と矛盾するものを順番に二つ、つまりより駄目なもの二つを選べばよい。はつきり矛盾をきたしているのは口・ホの二つだろう。口は本文50行目に「つねに西洋的価値観を準拠として来た日本知識人」などとあるように、「複眼的」ではなく、むしろ「西洋的価値観」という「單眼」で世界を認識していることになるはずである。ホは本文32～40行目「だとすると、本質的に無縁なのである。」の部分の内容を見てもわかるとおり、「正しく評価」しているのではなく、自らの「心的機制」によつて無意識に評価を決めているのである。

【問題】（演習）

出典：『蜻蛉日記』「中巻 天祿元年六月」の一節より／駒沢大学 文学部 94年

現代語訳

こういう（夫婦仲が気まずい）状態のまま（六月も）二十日過ぎになってしまった（私のいらいらした）気持ちは、どうすればよいかわからないほど変に、落ち着くところもない〔＝やりきれない〕ので、（時節がら蒸し暑いこともあって、）どうにかして、涼しいところでもあるだろうかと思つて、気晴らしかたがた浜辺の方に（行つて、夫との不仲の原因になつてゐる厄）お祓いでもしようと思つて、（琵琶湖畔は）唐崎へと（目指して）出掛けていった。（自宅を朝の）四時ぐらいに出発したところ、（有明の）月がたいそう明るい。私と同じよう（な境遇）である人、他に供に侍女が一人だけは（連れて）いるので、たつた三人だけが（牛車に乗つて、馬に乗つて）いる（警護役の下）男どもが七・八人ほど（付いてきて）いる。賀茂川のあたりで、ほのぼのと（夜が）明ける。（その賀茂川を）ちょっと過ぎて、山道にさしかかつて、京とは違つてゐる（あたりの風景の）様子を見るに（つけて）も、近頃の（沈んだ）気持ちであるからだろうか、（新鮮な感じで）たいそうしみじみと趣深い。ましてや（歌枕もある有名なあの逢坂の）関に行き着いて、しばらく車を止めて（車を牽いていた）牛に餌やりなどの世話ををしてると、台車だけの荷車を牽きつなげて（いて、その荷台には見たこともない）変わった木を、（山から）伐り出して（載せて）、たいそう薄暗い（山林の）中から（出て）来る（光景）も、気持ちを一新したようと思われて、たいそう興味深くおもしろかった。

（逢坂の）関の山道に、ああ（あの風景も）感動的ね、ああ（この風景も）すてきだと思いながら、行く手を（遙かに）眺めやると（視界に入つた琵琶湖が）果てしもなく広々と見えて、（その湖面に）鳥が二、三羽（浮いて）いると見えたが、（それは）よく考えてみると釣り舟に違ひない。（果てしない湖に、漂いつつも頼りなく浮かぶちっぽけな釣り舟は、まるで自分の近頃の人生を象徴しているかのようで、そんなことを思うと）その場所で、（はらはらと涙が溢れてきて、その）涙は抑えることができなくなつてしまつた。言う

に足りない「＝取るに足りない」（私の）心でさえ、このように（涙がこぼれるほどに）感動するのだから、ましてや、（同行の）別の人は、（なおさら）しみじみと感じ入って泣くようである。（お互いに）きまりが悪いほどに（涙が流れることだと）思われる所以で、目も見合わせられない。目的地（の唐崎）はまだまだ遠いが、（牛車は）大津の（町の）何となくひどくごみごみした家並みの中に分け入つていった。そんな（町並みの風景も）ものめずらしい気持ちがして（大津を）通り過ぎると、（見渡す限り）広々とした浜に出た。（今私たちが）やつて来た方向を眺めると、湖畔に並んで集まっている家々の前に、（多くの）舟を岸に並べて寄せ合い寄せ合いで（泊めて）ある（景色）がたいそう興味深くおもしろい。（一方、湖の上では）漕いで行きすれ違う（多くの）舟もある。

解答

問1 (1) ウ

(2) エ

(3) イ

問2 まして〔10行目〕

問3 気持ちを一新したように思われて〔解答例〕／すっかり気分転換したように感じられて〔別解〕

問4 ク

【問題】(自習)

出典：『枕草子』「第百三十七段」の全文 ／ オリジナル問題

現代語訳

(陰曆) 五月のころ、月もなくたいそう暗い夜に、「女房はお詰め申し上げていらっしゃいますか」と何人もの（男の人の）声で言うので、（奥にいらっしゃった中宮さまが）「（表のほうまで）出てごらんなさい。いつもと違つて（大声で）呼んでいるのは誰かしらと（気になるから）ね」とおっしゃるので、（私が出て）「これはまたどなたですか。たいそう大きさに、突拍子もない（声でおっしゃる）のは」と言う。（すると今度は）何も言わずに、御簾を持ち上げてガサガサと（外から何か）差し入れてくる（ものがあつたので、見るとそれは）、くれ竹〔＝淡竹^{はぢく}〕であったことだ。（その中国渡来という竹を見てふと詩句が思い出されて、私がついみんなに聞こえてしまふような声で）「おや、『この君』さんでいらっしゃいましたか」と言つたのを聞いて、（人々は）「さてさて、この（名答の）ことをとりあえず殿上の間に戻つて（みんなに）話そう」と言つて、式部卿の宮の源中将（頼定）さまや、六位（の藏人）たちなど、そこにいた（とあとで聞いた）人々は去つてしまつた。

(ことの言いだしつべの)頭の弁・藤原行成さまは（その場に）お残りになつた。「おかしなことにみんな立ち去つていつたものだなあ。(いや実は、清涼殿の)御前の（お庭の）竹を折つて、（それを題に）歌を詠もうということで（実際に竹を折るところまでは）したのですが、せつから同じことなら中宮職に参上して、女房さんたちをお呼びだし申し上げて（みんなで詠んだらおもしろかるう）と（竹を）持つてきたのに、呉竹の（別）名をすかさず言われて（すごすご）引き返していつたのは気の毒ですよ。（それにもあなたは）誰の教えを聞いて、（女の）人が普通なら知るはずもない（呉竹を『この君』と呼ぶなどという）ことを言うのかな」などとおっしゃるので、「(たまたま申し上げた『この君』が)竹の名前（になること）などとは存じませんでしたのに。無礼なやつだときつと今頃は（皆さま私のことを）思つておいでになるのではないでしょうか」と言つと、「(はいはい)本当に、それは知らなかつたのでしょうか」などとおっしゃる。

(その他の) まじめなことなども（行成さまと私とで）話しあつて（行成さまが）座り込んでいらっしゃると、「裁ゑてこの君と称す」と（詩句を）朗詠しながら、（殿方たちが）再び集まつてきたので、（行成さまが）「殿上の間で話しあつて約束した（ことの）本来の

目的も遂げずに、どうしてお引き返しになつたのかと、不思議に思つていただところですよ」とおっしゃったところ、「あんな（当意即妙の）言葉には、何と返事をしましようか。（中途半端な受け答えをするくらいなら）なまじつか（何も言わないでいたほうがよい）でしよう。殿上の間でも大評判になつておりますぞ。帝も（この話を）お聞きあそばして、面白がつておいであそばしました」と話す。頭の弁（行成）さまも（人々と）一緒になつて、同じ詩句を何回もお唱えになり、大変に興趣があるので、人々は皆それぞれに（明け方まで）しゃべり明かして、（清涼殿へ）帰るときにも、やはり同じ詩句を声を揃えて吟じて、（その声は皆さまが）左衛門の陣に到着するあたりまで聞こえていた。

翌朝、たいそう早く、少納言の命婦という（帝づきの女官）が、（帝から中宮さまのところに）お便りをお届けした際に、この（昨日の）話を（中宮さまに）申し上げたところ、（中宮さまは）局に下がつて（私）をお呼び出しになつて、「そんなことがあったの」とお尋ねあそばすので、「存じません。どういうことだとも知らずにおりましたのに、行成さまがうまく取り繕つてくださつたのでございましょうか」と申し上げると、「いくらいいようにとるといつても（種がなければ話も作れないでしようからね）」とおっしゃつて、にっこりしておいであそばす。

（中宮さまは）誰のことでも、「殿上人が誉めていた」などとお耳になさると、そのように誉められた女房のことをも、（一緒になつて）お喜びくださる（というお人柄な）のも素晴らしい。

〔参考〕文中の詩句は『本朝文粹』卷十一の「晋の騎兵参軍王子猷、裁ゑて此の君と称す。唐の太子賓客白楽天、愛して吾が友と為す」。『和漢朗詠集』にも収録された名句。なお、前句は王子猷が竹を好み、庭に三本植えて「何ぞ一日も此の君なからんや」と言つたという故事を踏まえる。また後句は『白氏文集』に「水能く性淡にして吾が友たり、竹心虚しきを解す即ち我が師」とあるのを勘違いたしたもの。

解答

問1 A=エ C=エ 问2 エ 问3 ウ 问4 イ

问5 エ 问6 カ 问7 ア 问8 ウ 问9 エ

問1 A この傍線部は、「いつもと違つて『女房はいるか』などと言うのは誰だろうかと」の意味になる。また発言者は、会話文を受ける動詞が「仰せらる」と最高敬語になつてゐるので、作品名と文学史の知識から中宮定子だとわかる。「誰だろうかと」に統く言葉が中宮のものとして表現されなければならないのだから、ア・イのような「言ふ」系の敬語は不適切。残りはすべて心情語で、最も基本的な意味あいはそれぞれ、ウ||「煩雜」、エ||「不審」、オ||「不吉」といったところである。中宮はそれ以上はその夜のでき」との展開に関与していないので、「誰だろうかと」の疑問に最も自然につながる工を探る。

C 傍線部の前に「同じくは」とあるのに注目。これは「どうせおなじことなら」という意味だから、傍線部の後に省略された行為は、「同じくは」と言う前にしようとしていたことに一致するはずである。「歌よまむ」がそれに相当する。

問2 「「ても」は、現代語では《逆接仮定条件》に用いられることが多いが、古文の「「ても」は「単純接続（接続助詞）+強意（係助詞）」の働きにすぎず、この場合「も」をはずしても意味は変わらない。古文での逆接仮定条件は「動詞型終止形・形容詞型連用形+とも」の形で表される。したがつて、逆接仮定で訳出しているア・ウは文法的に排除できる。あとは、宮中で「職（「しき」と読む。中宮職すなわち中宮のための役所・宿舎）」を夜に訪れるができるような高位の貴族が「質素な身なり」というのはあたるまい。したがつて正解は工。

問3 傍線部は「……や……らむ」の係結びで疑問文になつてゐる。ア・イは肯定文として訳してゐるので、この段階で不適切である。

（解釈が選択肢で与えられる場合は、「……や……む」が「……かもしれない」などとなつてゐることははあるが、「……だろう」では単なる肯定的推量となつて、疑問文型の訳としては強すぎる。）ウ・エの最大の違いは形容詞「なめし」の意味の取り方にある。「なめし」は現代語で使われない古語の中でも基本的なもので、「無作法」を意味するが、この語に「無知」の意味合いはない。よつて正解はウ。

なお、これがどうして「なめし」なのかといえば、吳竹の名を「この君」と呼ぶのは漢詩に典拠のあることで、平安時代には漢学の素養をひけらかすのは女性にはふさわしくないと考えられていたからである。問題文に先立つ出題条件のところに「作者の漢籍に対する造詣の深さ」というヒントがあり、傍線部直前の行成の言葉に「人のなべて知るべうもあらぬことをばいふぞ」とある

ことと合わせると、ここが作者の漢籍への造詣の表れと考えることができる。本来は男性の持ち分であるはずの漢学的知識を、男性の頭越しに口走ってしまったことを悔やんでいる表現である。（あるいは、これにたいする行成の反応をみると、勝ち気な作者が負けん気で男性にいいところを見せようとしたことの照れ隠しとも読める。）

問4 傍線部の後に「なにのいらへをかせむ」という反語表現がある。したがって、「さること」にたいしては、実際には返事をしなかつたが、本来なら返事をしてもよかつたような状況であることがわかる。また、直前の発言は「～とのたまへば」と敬語で表現されており、行成の発言である。さらに、この発言自体の中に「殿上」すなわち男性貴族の清涼殿中における控え室での様子が語られているため、この会話文の発言者は、「また集り来たれば」（9行目）と表現された男性貴族たちであることもわかる。したがって、「さること」の指す内容は「また」の前に、男性貴族たちが一度やつて来たときの場面にある状況、ということになる。初めに来たときは、行成も他の貴族たちと同道している立場なのだから、「さること」は男性貴族たちに対する作者の態度を示すことになる。これでア・イを残す。（ウは行成から作者へ、エは行成から他の男性貴族たちへの発言である。）さらに、アの誰何^{すいか}に対しことは、呉竹を見せるという形の反応が示されているので、正解はイとなる。

なお、「いらへ」は「応へ」で「返事・反応・応答」のこと。後には「答へ」と混同されるようにもなるが、本来は「答え」が質問などの内容に的確に回答することをいうのに対し、「応へ」は回答そのものでなく何らかの反応があつただけで使えるというニュアンスの違いがあつた。例えば「～デスカ」と聞かれて「ハイ／イイエ」などと言えば「答へ」になるが、「エッ、今ナントオッシャツタノ」なら「応へ」である。

問5 形容動詞「なかなかなり」は副詞「なかなか」と派生関係にある語で、意味用法もほぼ共通する。その意味するところは多岐にわたるが、大別すると「却つて」／「中途半端だ」の二つにわけられ、後者から「なまじ～ならせぬほうがましだ」といったニュアンスでも用いられる。まずはこのような解釈が表れていないア・ウを排除する。イ・エについては、問4の「なにのいらへをかせむ」で見たように、実際には返事をしていないのだから、イでは不適切である。

問6 傍線部を含む文の冒頭に「つとめて」とあり、ここではすでに翌朝のことになつていて、前夜の作者と男性貴族たちとの対話と

は場面が変わっている。また傍線部の後に「啓す」という絶対敬語が用いられている。したがって、手紙の宛て先は中宮定子であると判断できる。これで選択肢はイ・カに絞り込める。問題は差出人だが、手紙を持ってきたのが「少納言の命婦」と呼ばれる人物であることに注目する。「命婦」^{みょうぶ}とは後宮の女官であるから、これは「頭の弁（＝ここでは行成）」でなく「天皇」の手紙と見るのが妥当である。

ここで天皇が后である中宮に「手紙」を書くのを不自然に思つた諸君もあるかもしれないが、中宮（や作者たち）が現在滞在しているのは、宮中とは言つても「職」である。先にもふれたが、これは正式には「中宮職」という役所であり、「大内裏」の中にはあるが、天皇の生活の場である「内裏」からは東に向かって出たところにあつた。前夜の場面で、一旦清涼殿に帰つてまた戻つてきた貴族たちが「殿上にてひののしりつるは。うへ（＝天皇）もきこしめして、興ぜさせおはしましつ」と語つてゐる。つまり、前夜の出来事はすでに天皇の耳にも達しており、そのことにも触れた内容の手紙だつたということである。

問7 「下なる」の「なる」は、断定の助動詞の連体形であるが、断定の助動詞は場所を示す名詞に接続するとき、《所在》の用法を持つことを思い出しておこう。また傍線部直後の「めして」は、ここでは「呼び寄す」の尊敬語「召す」である。続く部分で中宮と作者との会話が表現されているので、これは中宮が事実関係の確認のために作者を呼び出したことになる。これで、身分をいうことは排除できる。さらに問6で見たように、ここは「つとめて、いととく」つまり翌朝のかなり早い時間の場面だから、昨夜はこの場にいた作者が実家に帰つていると見るのは不適切。問題は作者のいたのが「局」なのか「下座」なのかだが、「女房」と呼ばれる人々が「下なる」と表現されるときは、その人物にあてがわれた「房」つまり「局」に下がつていることをいうのが普通である。これは「つとめて、いととく」という時間帯にも適う。よって正解はAとなる。

問8 「文法的に他と異なるもの」という表現は、設問となつた語のグループによつて様々に解釈されうるが、ここでは同一語が選択肢となつてゐるわけではないので、活用や意味の識別ではないだろう。そこで品詞レベルで比較を試みる。するとウ(c)だけが助動詞でないことがわかる。

(c)の「けれ」は一見すると《詠嘆・伝承過去の「けり」の已然形》と紛らわしいが、直前の「いとほし」までで単語が成立していると見ると、これは《形容詞の本活用終止形》で、助動詞は接続できない形になつてしまふ。したがつて、「いとほしけれ」が

一語で『形容詞の本活用曰然形』であると見なければならぬ。

問9 「さまざまな作品に影響を与えた」などと言わると、古典文学の専門家でないとわからないような広く深い知識を求められて
いるかのように錯覚しがちだが、選択肢を見ると何のこともない。「影響」があるというのだから作品の傾向の最も似ていると考
えられるもの、つまり同一ジャンルのものに絞ることを考えるが、『枕草子』と同じく「隨筆」に分類されているのは選択肢中に
は『徒然草』しか含まれていないから、「一つ」選ぶならこれを採ればよい。

【問題】（演習）

出典：「落寢物語」／立教大学 法学部 01年・改題

現代語訳

姫君は、人目もない折ということで、（筝の）琴をとても上手に好ましい感じで唄きながら弾いていらっしゃる。帯刀が、（それを聴いて）見事なものだと（感心して）聞いて、「このようなこと〔＝音楽の素養〕を身につけておいでになつたとは」と言うと、（あこぎが）「そうなのよ。（姫さまの母上にあたる）亡くなつた奥方さまが、（姫さまの）六歳でいらっしゃつたころからお教え申しあげていらっしゃつたの」と言つてゐるところに、少将がたいそうこつそりと忍んでいらっしゃつた。（帯刀のところへ）従者をお行かせになつて、（従者の口から）「申し上げなければならない用件があつて（私が参上しました）。（帯刀様、部屋から）出ていらしてください」と（少将の来訪をあこぎに悟られないように）言わせると、帯刀は察して、（少将が）いらっしゃつたのだと思つて、慌てながら、「すぐにおまえと）会つてやるよ〔＝すぐにそこへ行くよ〕」と言つて（部屋から）出ていつてしまつたので、あこぎは（姫君の）御前に參上した。

少将が「（首尾は）どうだ。こんな雨（の中）に來てゐるのだから、（私を）無駄足で帰らせるな」とおっしゃるので、帯刀は「まず（前もつて）御連絡をくださつて（からのほうがよかつたのに）。前触れもなくいらしてしまつたものですなあ。姫君がどうお思いになるかもわからず、（すぐに姫君のところに御案内するのは）たいそう難しいことでござりますよ」と申しあげたので、少将が、「そんなにひどく生真面目ぶつちゃいけないよ」と言つて、（冗談で）ぴしゃりと（帯刀を）お叩きになると、（帯刀は）「まあいたしかたありません、（車から）お降りあそばしませ」と言つて、（少将は帯刀と）一緒に（門内に）お入りになる。（少将の乗ってきた）御車は、「（明朝）まだ暗いうちに（迎えに）来い」と言つて、（帯刀が）帰した。（帯刀は）自分（たちの使つてゐるあこぎ）の部屋の入り口にしばらく留まつて、（今夜そのように）あるのが期待されること〔＝手笞、段取り〕を（少将に）申しあげる。（少将が）人目のないときな

ので、安心だと思って、「まず（姫君を）覗き見させろ」とおっしゃるので、（帯刀が）「しばらく（お待ちください）。（御期待を裏切つて少将さまが）がっかりなさると困ります。（もし姫君があの）『物忌みの姫君』の（変わり者の主人公の）ようであつたら」と申しあげると、（少将は）「（そのときは）笠を取るも取りあえず、（笠の代わりに）袖を（頭に）ひきかぶつて帰るだけのことさ」とお笑いになる。

（帯刀は少将を）格子（の脇から中の廊の間）にお入れして、留守番の宿直の人が見つけるかと（用心して）自分もしばらくは簾の子にいる。（少将の）君が（部屋の中を）御覧になると、今にも消えてしまいそうなほどに（細く）灯をともしてある。（目隠しになる）几帳も屏風もとくにないので、（中の様子が）よく見える。向かいあつて座つているのは、あこぎであるようと見える。容姿や髪の様子が美しく、白い着物（と、その）上につややかな搔練（＝練り絹）の袖を着ている。（その傍らで脇息に）寄りかかっている人がいる。（姫）君にちがいない。白い着物で着慣れていると見られる着物を着て、搔練の張り綿なのにちがいない。（その着物を）腰から下に引きかけて、横を向いているので、顔は見えない。髪の様子や、髪が頬にかかる様子が、たいそう美しい姿だと（少将が）見ていているうちに、灯が消えてしまった。

解答

問1 甲＝とのい

乙＝きちょうど

問2 ①＝り

②＝なり

問3 イ＝好ましく

口＝そうなのよ

ハ＝無駄足で

ニ＝覗き見

問4 「申し上げねばならない用件があつて私が参上しました。帯刀様、部屋から出でいらしてください。」〔解答例〕

問5 3 少将を姫君に対面させるのが難しいこと。〔19字・解答例〕

問7 1

問8 (a)＝2

(b)＝5

(c)＝1

現代語訳

犬宮の御座所としては、（犬宮の母宮と）同じ母屋の西側に、まことに小さい几帳を立てて用意していらっしゃる。幼い子どもたちが（犬宮の遊び相手として）座つて小さい碁盤で碁を打つていて。（犬宮の）お手が、綾織りの单衣で（黒く見えるほど）濃い紅色の（着物の袖口）から出でいらっしゃるのが、たいそうかわいらしい感じでいらっしゃる。父君（の仲忠さま）が「兵衛などは、犬宮とどのようないらっしゃるのかな」と（言つ）て（碁盤をのぞき込むように）御覧になると、（犬宮は）おはにかみになつて（それ以上は碁を）お続けにならない。近くにいた何人も（の、犬宮の遊び相手の子どもたちも、仲忠さまのお姿を）見つけて（恥ずかしがつて）走り去つたので、「（犬宮の遊び相手といつたら）まるでもう（お転婆で）、話にもならない供人だなあ。（女の子なのに走つて逃げるあたりは、）裳を着ている（成人した娘たちの）足音とは違うものだね」と（仲忠さまが）おっしゃるので、年輩の女房たちも、ほんとうにと（言つ）て笑う。

大将「（=仲忠さま）は、犬宮に申しあげなさる。「弾きたいと言つていらっしゃった琴をお稽古させてあげましょね」とおっしゃるとたんに、（犬宮は）とてもうれしいとお思いになつてにつこりしておいでになる、（その）たいそう明るく美しくて魅力が溢れるほどでいらっしゃるのを、（父の仲忠さまは）ほんとうにかわいいとお思い申しあげなさる。「（あなたが）琴をお稽古あそばしますなら、お母さまにはお聴かせ申しあげずにお稽古なさらなければなりません。（この父があなたを）とっても楽しくておもしろいところにお連れ申しあげて、（お母さまとはしばらくお別れだが）おばあさまはきっと（そこで待つて）おいであそばしましよう（から、そこでお稽古なさい）な」と（仲忠さまが）おっしゃると、（犬宮は）「でも、お母さまがおいでにならないんじや、どうしようかしら」とお答えになるので、（仲忠さまが）「たいそう残念で（はあるけれどね）、そ（んなことをおっしゃつ）ては、困るなあと聞こえますよ。誰にも聴かせずに、この私とおばあまとだけでね、あなたに教えてあげるのです。しばらく我慢なさつておいであそばしませ。そして上手に弾けるようにおなりになつたころに、お母さまはきっとおいでになりますよ」と申しあげなさると、（犬宮は）「それならきっといいでしょ。」（でも）どうして、お母さまにはお隠しになるの」（すると仲忠さまが）「（まわりで）みんなが聞いているときにも

お弾きになるのは、そこいらに（どこにでも）ございます琴をね、そんなときにはお弾きになるんだよ。（でも）こ（の）これからお教えする琴）は別なのです。だれかに聞かせてしまうと、（琴の）音もしない。（また曲を）身につけることもできません。（だからこれからお連れする所は）お母さまも（あなたの叔母上の）二の宮もいらっしゃらない所です。（でも琴を習うには）たいへん良い所でござりますよ」と申しあげなさるので、「では、ちやはは（も来ないの？）」と（犬宮が）おっしゃるのは、（何人もいる乳母の中でも）（とくに犬宮が）慕つておいでになる御乳母のことであった。「そ（の乳母）ならきつと（お供して）お側近くにお仕えするでしょう」（と仲忠さまがおっしゃると、犬宮は）「そしたらお母さまは（ちやははのことを）羨ましいとおっしゃるでしょうね」（とおっしゃるので、仲忠さまが）「でもね、（乳母も琴の）音が聞こえないくらいの所に控え（させ）ておいて、（それでも）お乳がほしくおなりあそばしたら、すぐに（乳母の所へ）きつとおいであそばすようにしますからね」（とおっしゃると、犬宮は）「ではやっぱり長いこと、お母さまにはお目にかかれないのでしょうか」（とおっしゃるので、仲忠さまは）「どうして（そんなことがあるんですか、いやいや大丈夫。ほんのしばらくのことだよ」とお話し申しあげなさるのも、（母宮は犬宮をいつも）たいそうかわいがつておそばから離さないようにし申しあげていらっしゃるのに、（秘曲は血のつながりがなければ伝えてはならないという事情について）幼な子でおいでになる（犬宮の方）はごまかしてでもお連れてできる。（しかしながら）母宮はどのようにお思いになり（何と）おっしゃることだらうかとお気の毒ではあるが、（かといって）そのように（秘曲の伝授に関して直系でない人のいるところでお教え）してもよいことではないのだから（仕方のないことだ）と（仲忠さまは）お思いになる。

解答

問1 2 问2 1 问3 あいぎょう

問4 あなたが琴をお稽古なさるなら、お母さまにはお聽かせ申しあげずにお稽古なさらなければならぬ

問5 率 问6 4 问7 5 问8 3 问9 3 问10 4

問1 全選択肢に共通に「～感じで」とあるのは傍線部Aに含まれる「げに」に対応する。「～げなり」は「～」に客觀性を付与しつつ形容動詞化する接尾語である。「うつくしげなり」は形容詞「うつくし」から派生した形容動詞で、「うつくし」が古語では「小さなものにたいする愛情」を示す語であることから、簡単に選択肢2が選べる。ちなみに、それぞれの選択肢から「感じで」を外して基本的な意味を考えるとき、それぞれに対応する形容詞・形容動詞として一般的なものには、1 「おとなし」、3 「さやけし・さやかなり」、4 「あてなり」、5 「うるはし」などが挙げられる。

問2

動詞に音便が現れるのは「四段・ナ変・ラ変」(つまり未然形がア段音になるもの)に限られる。これで選択肢は1・3に絞れる。またハ行(およびバ行・マ行)の音便はウ音便(「たまひて」→「たまうて」など)なので、これで3も消える。サ行のイ音便といふのは関東では用いられないが、関西語ではいまも聞かれる。なお、動詞の音便について確認すると、まことに述べた「未然形がア段音になる動詞」の「連用形」に集中するが、これは最もよく使われる活用型の、最もよく使われる活用形の発音が簡略化されるためである。ただし、「ラ変型活用語連体形」については、その下に《推定・当然》の助動詞が続くとき《撥音便》化するのが普通であり、またその撥音便「ん」は表記されなくなりがちであることに注意しておくこと。「なめり」などがその例である。

問3

「愛敬」は現代語では「愛嬌」と書かれることが多いが、古語での発音は「あいぎょう」と濁る。(字音仮名遣いでは「あいぎやう」)だが、最近の出題では熟語の読みは基本的に現代仮名遣いで憶えておけば十分である。)

問4

文法の面からは、(a)二つの助動詞「せ」の用法の識別、(b)「給はば」の《尊敬語》・《順接仮定条件》、(c)「奉らで」の《謙譲語》・《打消接続》、(d)「べき」の用法の識別、などがポイントとなつていて。また語彙の面からは、(e)「習ふ」の解釈がポイントである。さらに文脈の面からは、「琴ならふ」の「琴」は意味上「習ふ」の主語には立てないので、「習ふ」の主語が省略されていることがわかり、(f)これを明示する必要がある。また(g)「宮」の訳し方にも注意する。

(a) 「せ給ふ」の「せ」は下に尊敬補助動詞を伴うので、これが《使役》・《尊敬》のどちらのかは文脈に依存し、文法上の主語と実質的な動作主とが一致しなければ《使役》、すれば《尊敬》となる。したがって、(f)まずこの主語を確定する必要がある。問

題文15行目で父から娘へ「希望どおりに琴を『習はい』てあげようね」と言うと娘は大喜びすることが書かれている。その後に傍線部があることから、「ならはせ給」う主体は犬宮だと判断でき、父から娘に対する会話文中の表現だから主語も犬宮その人だと判断できる。よって(a)「ならはせ給はば」の「せ」は《尊敬》の用法で、(b)「お～になるならば」と訳せばよい。これに対しても(a)「せ奉らで」の「せ」は下に尊敬補助動詞を伴わないので、それだけで《使役》の用法だとわかる。(c)「奉らで」は「お～申しあげずに」と訳す。(d)「べき」は「なむ」と係り結びして連体形になつていて、「なむ」は肯定文のまま強調しているだけなので「べし」のつもりで訳せばよい。基本的には《当然》の助動詞だから解答例のように訳したが、この文脈では父から娘に向かって《対称(＝二人称)》主語で述べる文末だから《命令》・《勧誘》で解釈することもできる。「しなさい」などと訳しても得点は同じだろう。

(e)「習ふ」は「習慣」などの熟語からもわかるように、本来は「繰り返し(て身につける)」ことである。「教わる」ことではない。「教わる」に近いのは、「まね」に由来する「学ぶ」である。ここでは、「楽器の演奏を繰り返して身につける」ことを意味しているから「稽古する」・「練習する」などが適当な訳語となる。

(f)についてはすでに(a)に関連して確認した。ちなみに、父親から娘(しかもまだ乳母の乳を欲しがりかねないほどの幼児)に最高敬語を使うのは、べつだん不自然なことではない。これはなにも娘が皇族の血を引くからというだけではなく、当時、貴族階級では面と向かうときには互いに最上級の敬語を使うのがむしろ礼儀に適つた習慣だったためである。なお、(g)解答例では原文の「宮」を「お母さま」とした。注釈がなくとも「宮」が「犬宮」の母であることは問題文15行目「いとあはれにまつはし奉り給へる」などの表現からも十分に推測できるし、まして注釈がついているのだから、このように訳すのが当然である。実際の採点においては「宮」のままでも減点しない可能性もあるが、理屈を言えば「犬宮」も「宮」の一人ではある。人間関係についてはなるべくわかりやすく表現することを心がけること。

問5 傍線部②直前は格助詞であり、また直後に接続助詞「て」があるので、「ゐ」だけで《用言の連用形》であることがわかる。連用形が「ゐ」となるのは形容詞・形容動詞ではありえず、また語幹と活用語尾の区別がないことから、これは「ワ行上一段動詞」だとわかる。「ワ行上一段動詞」には「居る」・「率る」しかし、文脈上「率」を採らざるを得ない。なお、「率る」は「連れる」ことを示し、「居る」は「じつとしている」ことを示す。「居る」を「座る」と訳することは確かに多いが、これは訳例に過ぎず、文

脈によつては「座る」では誤訳となることもある。辞書を読み込んで「訳例」ではなく「意味」を理解しよう。

問6 傍線部Dは地の文中にあるので尊敬語である。（下一段の謙譲「給ふ」は会話用語である。）尊敬語は「語り手から話題中の行為の主体へ」の敬意を示し、「行為の主体」はより具体的には「その敬語に対する主語」と言つてもよい。地の文の語り手は作者・筆者・編者だから、これで選択肢は1・4に絞れる。また「聞え給へば」の主語は明示されていないが、ここが一連の会話であり、第二段落冒頭に「大将は、犬宮に聞え給ふ」と明示されているのだから、その会話を交わすのは「大将＝父・仲忠」と「娘・犬宮」だとわかつている。父が娘に琴を教えてあげようと言つてはいる一連の会話文の内容に照らして、この発言の主体を「仲忠」と特定する。

問7 傍線部Eは直後に「は」という係助詞を伴う。この助詞は「その受ける語を取り立てて、他とは異なることを暗示する」働きを持ち、対比に用いられることが多い。ここでも、傍線部に先行する文に「みんなの聞くにも弾き給ふは」とあって、この「は」と傍線部に続く「は」とがセットになって対比を示している。この点に気付けば、「まわりに人がいるときに弾くもの」と対比されたものを答えればよいことになる。これで「琴」について述べた選択肢3・4・5に絞り、次にその修飾語について検討する。傍線部に続いて、「宮のいなないところで稽古する」と述べているが、選択肢3ではその根拠とならない。4は傍線部の直前で触れた琴のことを言つており、これでは前後が対比にならない。したがつて正解は5となる。

なお、傍線部に続く「ことなり」は「異なり」という形容動詞である。これを「琴なり」と勘違いすると、一文が「琴は琴である」と言つたことになり、直前の文からの文脈が意味をなさない。念のため。

問8 16行目の節「宮……いとほしけれど」は傍線部直前「さるべき事ならねば」の条件として連続して解釈できる。さらにその前の節「児……おはしなむ」も、「宮」と「児におはする」とを「は」で対比したものと考えられる。この思惟の中で「宮」と「児におはする」とを「は」で対比していることから、選択肢2・5は外してよい。また4は父・仲忠の発言中に言及されただけで、この場面にはいない。さらに、これは基本的なことだが、平安時代の作品では一般に1「乳母」は地の文中では敬意の対象とはならない。したがつて消去法で正解は3となる。（なお、中世の擬古物語などでは、乳母にも地の文中で敬語を用いる例がある。）

問9

設問にいう「最も強く表れている気持ち」をつかむには、犬宮の発言を通じて、(a)その「気持ち」を示す語をとくに強調する修飾語があるか、もしくは(b)その「気持ち」に通じる表現が他の表現よりも数多く繰り返されるか、そのどちらかに注目するとよい。(a)についてはとくに目立つ表現がないが、(b)はそのつもりで読み進めれば見つかるはずだ。すなわち、問題文8行目「さりとも、宮おはせでは、いかでか」、10行目「などて、宮にはかくし給ふぞ」、13行目「さは宮うらやましとのたまはむな」、14・15行目「さてなは久しくや、宮は見奉らざらむずる」と、犬宮はほとんど一言ごとに母宮のことに触れている。これで、選択肢は母を恋しがる3・4に絞れる。あとは、4の「祖母がしつけに厳しい人のようなので」の根拠となる表現が文中にないことから、3を採る。なお、もうひとつ母宮に触ることは触れている選択肢があるが、これは「祖母も……いない」が不適。問題文9行目から祖母も父と一緒に犬宮に琴を教えようとしていることがわかる。

問10

『宇津保物語』は「伝奇物語」である。これと同じジャンルなのは4『落窪物語』。このジャンルは「作り物語」とも言われることがあるが、「作り物語」とは一般的には「伝奇物語」と「歌物語」が合流した平安中期の『源氏物語』以降を指すことが多い。
1『大和物語』は平安前期の「歌物語」だが、同じジャンルの他の作品が特定の人物の一代記として読まれるのとは一線を画し、中に含まれる一話一話が独立して「説話物語」的な要素を持つことに注意する。2『栄花物語』は『栄華物語』と書かれることもある。平安中後期に『歴史物語』の嚆矢として『大鏡』と同時代（やや先行か?）に成立し、藤原道長に対する徹底的な讃美に特色がある。3『宇治拾遺物語』は鎌倉時代前期の「世俗説話集」。先行する平安後期の『今昔物語集』と共に通のエピソードも多く含まれる。5『曾我物語』は鎌倉末期～室町時代の「軍記物語」で、曾我兄弟の敵討ちを題材とする。

L3M
早大国語



会員番号

氏名